

〔全日本選手権東北連盟大会規則〕

I 大会規則

2013年リトルリーグ公認競技規則及びトーナメント規則とガイドラインを適用する。

II 登録及び義務

1. 選手登録

- 1) 年齢 リトルリーグ年齢11歳及び12歳の選手
- 2) 人数 14名（ただし、11歳及び12歳の選手が出場リーグ内で不足の場合のみ、1

ないし13名でも出場を認めるものとする。）（東北連盟：12名以上18名以内）

2. 監督及びコーチ

- 1) 監督 1名
- 2) コーチ 2名まで
- 3) 監督、コーチは成人のものに限る。
- 4) 携帯電話等外部と連絡する事が出来る機器類はベンチへ持ち込んで서는ならない。

3. 登録した監督、コーチ、選手のみベンチに入ることができる。

4. 登録選手の義務

登録選手は全員試合に出場し、規則IXに明記されている特記事項「全員出場」の義務を果たさなければならない。

III 服装

1. 選手は全員統一した服装を着用し、ユニフォームの胸にリーグ名の表示のあるものに限る。

なお、白色のアンダーシャツは認めない。

2. 監督、コーチの上着は襟付きの白、ズボンは白またはグレーで統一したものを着用する。
3. 監督、コーチの帽子は選手と同じものまたは白で統一したものを着用する。

IV 用具

1. 捕手は試合及び練習中も公認のヘルメット（耳カバー付）、プロテクター（ロングタイプ）、

マスク、スロートガード、及びカップを着用する。

2. 非木製バットでBPF（バット性能指数）1.15の印字表記のないものは使用できない。

3. 瑕疵、変形等があるバットの使用の可否については審判が安全上の問題を最優先にその判断をする。

4. バットリング、マスコットバット、鉄棒、メガホンのベンチ持ち込みを禁止する。

5. 野球用手袋、リストバンドの使用を許可する。なお、投手は使用できない。

6. サングラスの使用は選手のプレーに必要なときは認める。監督、コーチの使用は禁止するが、大会本部が許可した場合はこの限りではない。

7. ヘルメットの顎ひもを着用すること。
8. グラブのひもは必要以上に長いものは認めない。
9. 出場選手には安全確保の為、胸部保護パッドを着用する事が望ましい。（東北連盟：着用義務）

V 試合の準備

1. ベンチは組み合わせ抽選の若い番号を一塁側とする。
2. 攻守は主将により、試合当日決定する。
3. シートノックは後攻より7分間とするが、都合でカットする場合もある。
4. シートノック時に限り背番号なしのユニフォームで3人までを自チームのボールボーイとして認める。
5. 試合前のブルペンでの投球練習を監督及びコーチが傍らで見ても良い。

VI 試合の運営

1. 延長戦は無制限とするが、大会本部は選手の健康管理には十分留意する。
2. 全試合、4回以降10点差によるコールドゲームを採用する。
3. ベースコーチは次の条件を満たしていなければならない。
 - 1) 自チームのユニフォームを着た有資格の選手と、監督、コーチが務めることができる。
 - 2) 指導者（監督、コーチ）は1人だけベースコーチに入れる。ただし、ベンチに監督とコーチが各1人の場合はこの限りではない。
- 3) 大人のベースコーチもヘルメット着用が望ましい。その場合、できる限りチームと同じものとする。
- 4) ベースコーチは自チームの打者、走者のみに指示することができる。
- 5) 大人のベースコーチは1塁・3塁どちらのコーチスボックスでも良いが、同一イニング中は移動できない。
- 6) コーチスボックスから出て自チーム打者及び塁上の走者に指示した場合は、攻撃側のタイムの數に数える。
- 7) 相手選手に対し威圧的な言動があった場合、1回目はベンチに戻す。当該者は、その試合中コーチスボックスに入れない。2回目は監督の退場となる。
4. ベンチ内の監督及びコーチはみだりにベンチを離れることはできない。
5. 攻撃側がタイムをとり、選手に指示する回数は1イニングに1回である。なお、守備側のタイ

ムのとき、攻撃側の監督及びコーチが選手に指示する場合は回数に数えない。ただし、守備側

の指示より長い時間は認めない。

6. 監督、コーチが投手に指示する場合は、マウンドで行うこと。このときに捕手及び内野手が集

合してもよい。監督、コーチ及び選手はスピーディーに行動すること。

7. 試合中に内野手がマウンドに集まることは規制しない。ただし、試合の流れや頻度に応じて、審判員が認めない場合もある。

8. 投手のウォームアップ時に、打者などが打者席付近に近づき、タイミングを測る行為を禁止す

る。

9. 走者やベースコーチなどが捕手のサインを見て、打者にコースや球種を伝える行為を禁止する。

もしこのような疑いがあるとき、審判員はタイムをかけ、当該選手と攻撃側ベンチに注意を与え、止めさせる。

10. ネット裏または観覧席から相手リーグの情報を伝える行為を禁止する。

11. ベースコーチなどが、打者走者（走者）の触塁に合わせて「セーフ」のジェスチャーとコール

をする行為を禁止する。

12. 「スペシャルピンチランナー」を認める。

13. 臨時代走

1) 打者及び走者が事故等で走者になれない場合、臨時代走を認める。なお、臨時代走者は投手

と捕手を除く打順の遠い選手とする。

2) 攻撃が終わっても前記の選手が速やかに出場出来ない場合は、選手交代となる。

3) 頭部に投球及び送球を受けたときには、必ず臨時代走を出すこと。

14. 走者がヘッドスライディングをした場合はアウトになり、ボールデットになる。

15. 不正投球が発生したときは走者を進塁させず、投球しない場合もボールを宣告して投球数に

算する。

16. 一試合に使う投手の数は制限しない。

17. 試合開始、終了の挨拶のときに監督は選手と一緒に整列する。コーチはベンチ前に整列する。

Ⅶ 監督、コーチ、選手の退場

1. 次の場合、大会本部及び審判員は監督、コーチ、選手を退場させる。

1) 自軍のベンチ及び応援席の中から、相手リーグ及び審判員に対し暴力及び暴言を吐いた場合、

監督及び当該者を退場させる。

2) 審判員の判定及び指示に従わなかった場合、監督及び当該者を退場させる。

Ⅷ 降雨、日没、時間制限等で試合続行不能となった時

1. 1回が終了していない場合は再試合とする。その場合、投球数を含む記録はすべてゼロとする。
2. 2回以降、試合が続行不能となり勝敗が決められない場合は、サスペンデッドゲームとする。
3. サスペンデッドゲームは大会予備日に行われる。その場合、すでに終了したイニング数に関係なく、正確に一時停止された状況から試合を再開しなければならない。
4. サスペンデッドゲームとなり、その翌日に試合が再開された場合、中断時点で投手であり、中断までに20球以下の投球数の投手は、続きの試合においてその投手の投球数はゼロからカウントする。
5. 中断までの投球数が21～40球の間であった場合、続きの試合においてその投手の投球数は中断された時点の投球数からカウントする。（東北連盟連日開催の特例措置：21球以上とする）
6. 41球以上投げた投手は規定の休息日が必要となる。
(注) 再開されたサスペンデッドゲームの投球数は中断した日の試合に加算する。

Ⅸ 特記事項

「全員出場の規則」

1. 試合当日ベンチ入りした選手は全員試合に出場しなければならない。
 - 1) 各試合時においてベンチ入りの選手が **13名以上の場合は、攻撃において少なくとも1打席は試合に参加しなければならない。** ベンチ入りの選手が12名以下の場合は、1打席以上と最低連続6アウトの守備をしなければならない。
 - 2) 全選手再出場できる。
 - 3) 交代で初めて試合に出場した選手は、全員出場義務を完了するまで交代できない。
 - 4) すでに出場条件を満たした選手が再出場するときは、出場条件に関係なく出場できる。
 - 5) 再出場の選手の打順は元の打順に入る。
 - 6) 退場させられた選手は再出場できない。
2. 負傷して退場した選手は出場条件を満たさなくともよい。
3. 選手の病気、負傷、退場で9人の選手を揃えられなくなった場合は、控え選手の中から交代選手を指名する。ただし、その人選は相手チームの監督が行うものとする。退場となった選手はこの再出場の対象とはできない。
4. 監督は全員出場義務規定を満たすことに責任を持たなければならない。試合が何らかの理由で短縮されない限り、当規則の例外は認められない。

注) 後攻チームが勝っていることで6回裏の攻撃（あるいは延長された回の裏の攻撃）を行っ

ていないことは、試合が短縮されたとはみなされない。

5. ベンチ入りした選手の1人以上がこの条件を満たさず、抗議されるかトーナメント委員会に伝

えられた場合、トーナメント委員会は、次のいずれかのペナルティーを科す。なお、さらなる

罰則もある。

1) 監督のすべての資格剥奪

2) 勝利チーム監督の続く2試合への出場停止

6. アピールは審判員が試合の終了を宣告した後、球場を出るまでに出場条件を満たしていない選

手の名前または背番号を審判員に申し出る。審判員が球場を出る前とは、フェンスまたは白線

で囲まれたリトルリーグの球場から審判員が全員退場した時点を指す。

7. 投手が全員出場義務を完了しており、打者の時に交代選手が出場した場合、実際に降板したの

でなければ一度に限り投手として再出場できる。

8. すべてのコールドゲームに全員出場義務は適用しない。

「投球規定」

1. 降板した投手はその試合では投手に戻れない。

2. 投球数を制限する

3. 年齢別投球数 11歳～12歳は1日85球までとする。

※例外 次に該当する場合は投球制限数に達しても投げ続けてよい。

1) その打者が出塁するか、またはアウトになるまで。

2) 第3アウトが成立し、そのイニングが終了するまで。

4. 休息日（東北連盟連日開催の特例措置：投手は、1試合空ければ登板が可能とする。）

1) 必要な休息日は次の通り。

・ 1日に66球以上の投球をした場合、4日間の休息が必要。

・ 1日に51～65球の投球をした場合、3日間の休息が必要。

・ 1日に36～50球の投球をした場合、2日間の休息が必要。

・ 1日に21～35球の投球をした場合、1日間の休息が必要。

・ 1日に1～20の投球をした場合、休息日は必要ない。

5. 選手は1日に2試合以上の投球はできない。

6. 投手が41球以上の投球をした場合、その日は捕手を務めてはならない。

7. 試合で4イニング以上捕手を務めた選手は、その日は投手を務めてはならない。

(注) 4イニングはアウト数(12)ではなく、守備についたイニング数とする。

8. 故意四球を出す場合は必ず投球しなければならない。その場合、投球数に加算される。

「スペシャルピンチランナー」

1. 先発メンバー以外の控え選手は何度でもスペシャルピンチランナーとして出場できる。
2. 控え選手が代走に出てそのまま守備につかないときは、もとの選手の打順に入らず、引き続き

控え選手となりスペシャルピンチランナーの権利は残る。

3. 控え選手が守備または打席についたときはスペシャルピンチランナーの権利はなくなる。
4. スペシャルピンチランナーで塁上にいるときは代打者になれない。
5. スペシャルピンチランナーの起用は1イニング1回のみである。
6. 各選手個人がスペシャルピンチランナーと交代できる回数は1試合に1度だけである。

X 補足

1. ベンチ内のプレーについて
 - 1) 常設の正規の球場は競技規則通りである。
 - 2) 仮設のベンチは危険性があるのでボールデットとする。
2. 選手からのハーフスイングのリクエストを受ける。
3. 全野手がファウルラインを越えたときにアピール権は消滅する。
4. 飛球をデッドライン、ホームランライン内で完全捕球したと審判員が認めた場合、選手が捕球

後場外に出てもアウトである。なお、野手がボールデット地域に倒れ込んだ場合はボールデッ

トとなり、走者に1個の進塁を認める。野手がボールデット地域に踏み込んでも倒れ込まな

った場合はボールインプレーとなる。

5. ネクストバッターサークルは作らない。次打者はベンチの出入口付近に待機すること。
6. 監督、コーチがグラウンドに入るときはコートを脱ぐこと。
7. ホームランを打った選手をたたえるときは、派手にしないこと。
8. 選手はユニフォームをきちんと着用すること。
9. 不正バット（規則 6.06(d)）を使用すると打者はアウトになる。さらに当該チームの監督と

打

者も退場となり、大人のベースコーチ1人がベースコーチに入れれない。

全日本選手権大会周知徹底事項

I スピードアップ

1. 投手はボールを受けたら速やかに投手板に付いて捕手のサインを受ける。
2. 捕手は受けたボールを速やかに投手に返球して、投手にサインを送る。
3. 捕手はホームプレートより前に出ないで野手に声をかける。
4. 内野手はボール回しを定位置で行う。
5. 内野手は外野手からのボールを定位置から投手に送球する。
6. 打者は打者席を外さずにベンチのサインを見る。
7. ベンチからのサインは短くする。
8. 守備につくとき、ベンチに戻るときは必ず走る。
9. 審判員はスピーディーな試合を常に心がける。

II 安全規約（抜粋）

- ・グラウンドに穴があいていないか、傷ついていないか、ガラス等の異物がないかといった点検を頻繁に実施しなければならない。
- ・ダグアウトとバットケースはネットなどの遮蔽物の後ろに配置しなければならない。
- ・試合中や練習中は選手、監督、コーチ以外はグラウンドに立ち入らないようにする。
- ・打ち終わったバットや外した装具をフィールドから持ち帰るのは正規の選手に行わせること。
- ・ファウルボールを回収するための手順を確立しておくこと。
- ・練習中や試合中に、すべての選手が1球ごとに打者を注意して見るよう指導すること。
- ・ファウルボール等が飛んでくることのない安全な場所で選手たちをウォーミングアップさせること。
- ・道具は定期的に点検すること。それが適合していることを確認すること。
- ・打者は練習中も試合同様公認ヘルメットを着用すること。
- ・メガネを使用している選手の親には“安全なメガネ”を準備するよう推奨する。
- ・打者用ヘルメット、捕手用ヘルメット共に製造元の許可なく塗装してはならない。
- ・病気や怪我で退場した選手も、親か引率者に引き渡すまで監督下においておくこと。